

史料にみる 歴 史

近世の特産物

最上紅花

『紅花屏風』

(青山永耕筆、
山寺芭蕉記念館所蔵)

17世紀末には、日本各地に特産物地帯が形成される。そうした特産物の代表例が、「最上紅花」である。近世には、藍や麻とともに三草の1つに数えられた紅花であるが、それから化粧などに用いられる赤色色料の「紅」（べに）がつくられた。庶民が紅を使用するようになったのは、近世になってからで、「紅一匁、金一匁」といわれたほど高価だった。

紅花は西南アジア原産のキク科の二年草で、日本へは7世紀ごろ

伝来。頬紅や染料に使われ、極めて貴重なものだった。紅花の栽培が盛んになるのは近世以降である。17世紀末には、出羽最上（村山地方、とくに山形・天童・谷地周辺）に集中するようになった。享保年間（1716～36）の全国の紅花産額は約1,000駄（1駄32貫、1貫は3.75kg）で、近世末期には約2,000駄とされているが、その半分は最上紅花で、1,000駄ぐらいを上下していたようである。

そうした最上紅花の製造プロセスを詳細に描いているのが、この青山永耕筆の『紅花屏風』で、幕末の作品である。この屏風は六曲一雙であり、右隻には、農家の春祭り、春の紅花の種蒔き、中央の遠景には紅花の畑と花摘みが、その手前には、生花の売買や花乾場、紅餅をつくる様子が細かく描写されている（上写真）。

紅花を流水につけて「黄気」（黄

色）を洗い出し、よく洗って2～3日寝かせ、水をかけて腐熟させる。これをまとめて花餅（干花ともいう）をつくり、筵にはさんで踏み、平らになったものを干す。このようにしてできあがったものを「紅餅」という。

掲載していないが、左隻では、荷主の店頭での荷造り作業と荷送りの様子、それからたくさんの紅花船が入港し、そして最後には京都の紅花問屋での取り引きの活況が描かれている。

紅花栽培が最上地方でとくに発展したのは、勿論、この地方の気象条件が紅花栽培によくあったからであるが、それだけではなく、紅花の需要地である京都とこの地方が、日本海海運と最上川水運によって密接に結びついていたことが挙げられる。

(立正大学教授 黒田日出男)